



University of California はカリフォルニア州全土に10のキャンパスを持ち、University of California, Irvine (UCI) はそのうちの一つです。1965年に設立され、以来、ノーベル賞受賞者も3名輩出している名門大学です。Irvine の町はロサンゼルス南にあり、町全体が Irvine Company により開発され、UCI のキャンパスは Irvine Company の寄付によるもので、計画的に町が造成されたため街並みが美しく、全米一安全な町にも選ばれたことがあるくらい治安が良好です。ビーチも近く、車で30分ほど走ると Newport Beach や Laguna Beach に着くことができます。1月でも暖かい日は25度近くまで気温が上がるので、天気の良い日に海辺を散歩するととても爽快な気分になります。ゴルフ場も沢山あり、ゴルフ好きの人にはたまらない環境かもしれません(幸か不幸か、私はゴルフをしないのですが、留学生仲間には強くゴルフを始めることを勧められました)。女子ゴルフの宮里 藍選手は、Irvine を拠点に活動しており、運が良ければスーパーで出会こともあるようです。

日本企業も多く、多くの日本人を見かけます。そのためか、日本食の店やスーパーもあり、食生活に困ることはありません。単身赴任であった私にとっては非常に助かりました。一方で、日本人の海外留学が減ってきているという報道があったように、現地でも韓国、中国、イランなどからアメリカに来ていた人々のパワーに日本人が押されている印象を受けました。

私が勤務している UCI Medical Center は、いわゆる大学の附属病院であり、Irvine とは離れた Orange にあります。Orange と言うと聞き慣れないかもしれませんが、Anaheim の隣町と言えばわかりやすいのではないのでしょうか。Anaheim には Disneyland があり、昨年、松井秀喜選手が所属していた、Angels Stadium もあります。病院の規模としては、UCLA や Stanford といった一流どころから比べると小さいのですが、地域の基幹病院としての役割を担っています。

基礎のラボであれば、研究漬けの日々なのでしょうけれども、臨床病院ですので、いわゆる臨床研究のお手伝いをしながら、アメリカの診療を見学するという

日々を過ごしています。放射線診療に関してこちらの病院を見学して思ったことは、日本以上に医療が細分化されていることです。しかも厳格で、外科的手術を行う際、術前の画像検査に対して放射線科専門医のレポートがないと手術を行うことができません。立場が保証されている分、責任も負っています。ただし、放射線科診断部門は中枢神経、胸部、腹部、骨軟部、核医学のセクションに分かれており、それぞれのセクションに3~4人のfacultyがおり、その下に1~3名程度の fellow が、さらに下に1~2名の resident がいるという、しっかりとした布陣となっています。外傷で頭部から骨盤までCTが撮影されると、頭部、胸部、腹部一骨盤、骨軟部の4種類のレポートが発行されます。骨軟部に関しては、骨条件だけのシリーズが作成され、その読影が骨軟部グループに依頼されるようです。検査装置に関しては、現在、新しく建設された診療棟の開院前で検査装置がフル稼働していない状態なのですが、それでもCTは5台、MRIは4台稼働しています。信州大学医学部附属病院と同等以上の装置を備えているのですが、検査件数は、腹部グループを例に挙げると、CTおよびMRI合わせて約30~40件程度です。Resident や fellow が行った1次読影に対して最低2名以上のfacultyが確定するといった具合で仕事が進みます。これは日本との医療制度が異なるためと思われる。ご存じの通りアメリカには公的医療保険制度がありません。従って、すべて個人や企業が加入している健康保険でまかなわれます。さらに、CTやMRIの検査料は日本よりはるかに高額で、担当医が患者の検査を行う際には、まず保険会社に連絡して検査を保険でまかなってもらえるかどうかの確認を行うことから始まります。ある意味、検査の適応が絞られており、日本の様な何でもCT、何でもMRIという風潮とは異なります。

研究面に関しては、私が興味を持っていたMRI信号の定量化の糸口になるのではないかとと思われるシークエンスは、新病院の開院が遅れに遅れているため見ることができないかもしれません。アメリカでは、「遅れる」もしくは「待たされる」のは当たり前なのですが、私にとってはとても残念です。一方、別の最新のシークエンスを用いた研究の立ち上げに参加させてもらったことは、私にとってとても有意義な経験でした。

私のアメリカ滞在も残り少なくなりましたが、少しでも多くの知識や経験を持ち帰り、日本での診療に活かすことができればと思っています。

人生には数々のチャレンジがあると思いますが、海外留学にチャレンジする機会には皆に与えられる物ではないと思います。最後に、このような貴重な機会を与えて頂き、角谷眞澄教授をはじめ画像医学講座の皆様には深く感謝申し上げます。また、単身で渡米することを許してくれた家族にも、お礼を言いたいと思います。

(2011年1月)

(信州大学医学部画像医学講座所属)